



| | |
|--------------|---|
| Title | デスカフェが映す現代日本の死生観 |
| Author(s) | Avdiushenkova, Irina |
| Citation | グローバル人文学研究交流会要旨集. 2025, 1, p. 58-60 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/100486 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デスカフェが映す現代日本の死生観

Avdiushenkova Irina (日本学・D2)

1. はじめに

近年、「死に対して前向きになろう」(Death-positive movement)という運動が世界中に広がっている。それによると、私たちは自分自身の死と親しい人の死についてもっと話すべきで、または避けられないものである死をもっと意識して生きる必要があるそうだ。デスカフェ(Death Café)という現象はこの運動の最も著しい例の一つである。デスカフェとは、死、葬式等常に話しにくいテーマについて自由に語り合える集まりである。参加は宗教、国籍、性別や年齢に関係なく誰でもできる。

デスカフェは比較的最近の現象である。最初のデスカフェは 2011 年にイギリスのウェブ開発者のジョン・アンダーウッドによって行われた。アンダーウッドは、お茶を飲みながら気楽に死を語るというアイデアを 2004 年から *café mortel* をしていたスイスの社会学者バーナード・クレッタズから見つけた。アンダーウッドが主催した最初のデスカフェの目的は、「人々の死に対する意識を高め、人生を最大限に活用するのを助ける」という目的だった。アンダーウッドの集まりはやがて「ソーシャルフランチイズ」になり、彼は誰でも自分のデスカフェが始められるように説明書を作成した。現在、デスカフェの集まりは、日本やロシアの都市を含む世界約 90 カ国で開催されている。

日本、ロシア、アメリカ、イギリスで開催されているデスカフェの機能や役割、参加者の考え方を、歴史的背景と合わせて比較し、現代日本における死生観の特徴を明らかにすることを目的に調査を実施した。

2. 日本と欧米のデスカフェの「共通点」と「相違点」

デスカフェの事例を検討する中で、それらは多くの共通点と相違点を持っていることが明らかになった。まず、上記の国々のデスカフェの共通点について述べる。

- 全てのデスカフェは、以下の共通の機能を果たしている。それは① 死についての対話の場を作ること、② 治療的な機能、③ 教育機能、④ 死を扱う専門家同士のコミュニケーションの機能である。
- タブーを取り除くことに重点が置かれる。全てのデスカフェは、死の話題に関するタブーを取り払うことを目指している。参加者には、オープンに死について話す機会が提供され、これによってより意識的な死に対する態度を育むことができる。
- 守秘義務と非評価。デスカフェの重要な側面は、参加者が自由に話すことができ、快適に感じる雰囲気を作り出すことである。ここでは批判や非難はなく、それぞれが自分自身の意見を持つ権利がある。デスカフェで話された内容は、集まりの外で共有されることはない。
- 関与と支援。全てのデスカフェの集まりでは、人々は自身の死に関する感情や思考に対して理解、共感、相互の支持を見出すことができる。
- デスカフェの集まりでは、可能な限り参加者には温かい飲み物と甘いものが提供される。オンラインの集まりでも、参加者はお茶を入れたり軽食を取ったりすることができ、まるで皆が一つのテーブルに座っているような感覚が生まれる。

しかし、各国のデスカフェを比較すると、多くの相違点も見つかる。これらの相違点は、各デスカフェを個別で特徴的なものにしており、文化的な文脈、習慣、および特定の国の死生観が表れている。異なる国のデスカフェの相違点を視覚的に理解するために、それらを以下の表にまとめた。

表1 日本、欧米とロシアのデスカフェの相違点

| | 比較パラメータ | 日本の デスカフェ | 欧米の デスカフェ | ロシアの デスカフェ |
|---|----------------|--------------|--------------|----------------|
| 1 | タブーとされるテーマ | ない | ない | 自殺は好ましくない話題である |
| 2 | 年齢制限 | ない | ない | 参加は18歳から |
| 3 | 死後に関わる話題 | よくある | よくある | 少ない |
| 4 | 会場となる宗教施設 | よくある | 時々ある | ない |
| 5 | 主催者としての僧侶や牧師など | よくある | 時々ある | ない |
| 6 | 参加費 | ある所が多い | ない | ない |
| 7 | 予め決めたテーマ | あるDCも少なくない | ほとんどない | ない |

上記の表からは、多くの日本の集まりが、そのデスカフェの創始者であるジョン・アンダーウッドが deathcafe.com のウェブサイトにて指定した以下のルールを無視していることが分かる。日本のデスカフェでは、話題はしばしば事前に選ばれ、集まりが始まる前に決まることが多い。また、多くの日本のデスカフェの主催者は参加費を取ることがある。他の特徴として、タブーとされるテーマや年齢制限の欠如、そして来世に関する話題への大きな関心が挙げられる。また、日本のデスカフェのもう一つの注目すべき特徴は、仏教との密接な関係だ。デスカフェの開催場所はしばしば仏教寺院となり、寺院の住職はよくイベントのファシリテーターの一人となる。

3. 日本のデスカフェ特徴

日本のデスカフェの最初の特徴としては、自殺を含め、タブーとされるテーマがない点が挙げられる。それは、日本の文化において、自殺はキリスト教の文化とは異なり、罪（Sin）とは見なされないためだ。また、日本のデスカフェでは年齢制限もなく、また主催者は、ロシアなどで見られるような攻撃や反対運動に一度も見舞われていない。他国と比べ死を相対的にタブーとしない理由は、日本の宗教や信仰、特に先祖祭祀に関連している可能性がある。他の先進国では先祖祭祀はあまり発展しておらず、日本以外では亡くなった人々との交流がまだ生きているかのように行われることはほとんどない。また、日本の人口の高齢化もタブーのない状態を作る一因である。多死社会では、死のテーマを無視することはできない。また、終活セミナーなどの多くのイベントも、死に関するディスカッションの発展を促している。

日本のデスカフェにおけるもう一つの特徴は、死後の世界の話が頻繁に議論されることであり、他の国では見られない現象である。この特徴の理由は、日本の多神教と、先祖祭祀に関連している可能性がある。多神教に関しては、日本ではさまざまな宗教が共存しているため、死後の世界についての異なる考え方が存在する。これが日本人の生死観に影響を与えることは間違いない。フィールドワーク調査においても、実際に多くの日本人が死後の世界と先祖の霊力を信じており、生きている人々を守護していると考えている。この現象の説明も、先祖祭祀に見出すことができる。死者に対して生者が日常的に接し、彼らとコミュニケーションをとることも、死後の世界についての考え方に影響を与える。

多くの日本人にとって、死に関するテーマは宗教と密接に関連しており、その中でも特に仏教が重要な役割を果たしている。歴史的に、日本では仏教が死と関連するすべての側面を担ってきた。江戸時代には寺請制度が導入さ

れ、この死と仏教の関係は始まった。現在でも、日本のほとんどの葬儀は仏教の形式に基づいて行われ、葬儀や法事、寺院の墓地での埋葬場所の提供が寺院の主な収入源となっている。

参加費が必要なデスカフェの存在と、一部のデスカフェと寺院との緊密な関係もまた特徴的である。デスカフェの主催者が参加費を求める理由の一つは、日本人の視点から、死に関するイベントに参加するために料金を支払うことは間違っていないと見なされる可能性があるからだ。特に、これらのイベントが寺院で行われ、仏教の僧侶が参加している場合、その見方はさらに強まるだろう。多くの日本人にとって、死に関するテーマは宗教と密接に関連しており、その中でも特に仏教が重要な役割を果たしている。歴史的に、日本では仏教が死と関連するすべての側面を担ってきた。

参考文献

五来重 (2021). 『日本人の死生観』 講談社.

Nelson, Roxanne (2017). Discussing Death over Coffee and Cake. The Emergence of the Death Café. *AJN, American Journal of Nursing* 117 (2),18-19.

Smith, Robert J. (1974). *Ancestor Worship in Contemporary Japan*. Stanford University Press.

吉川直人 (2020). 「国内のデスカフェの現状と可能性 —多死社会を支えるつながりの場の構築—」 『京都女子大学生活福祉学科紀要』 第 15 号,75-81.

吉川直人 (2021). 『デスカフェ・ガイド—「場」と「人」と「可能性」』 クオリティケア.